

みたか小鳥の森保育園

地域子育てニーズ調査報告書

2005年2月

第1章 調査の目的と内容

第1節 調査の目的

本調査は、みたか小鳥の森保育園（社会福祉法人みたか小鳥の森福祉会）が、この地域の子育て家庭のニーズ調査を行うことによって、地域の社会資源とニーズの現実に即して、みたか小鳥の森保育園を拠点とする今後の子育て支援事業を展望するための資料を明らかにすることを目的とした。

第2節 調査の実施主体と対象・内容

本調査は、みたか小鳥の森保育園を調査主体とし、集計・分析については、保育所職員の意見を十分に反映させつつ、埼玉大学教育学部福祉カウンセリング研究室に依頼した。

アンケート調査のフィールドは、東京都三鷹市にあるみたか小鳥の森保育園を中心とする地域である。対象者は、現在通常の保育を利用している子どもの保護者、過去5年間（1999年度～2003年度）に利用したことのある保護者、みたか小鳥の森保育園で現在行われている地域子育て支援サービスを利用したことのある保護者、および、みたか小鳥の森保育園の近隣に在住する0～2歳の子どもをもつ保護者である。また、0～2歳の子どもがいる家庭（一部地域は2歳児を含まず）の抽出には、地域内の全家庭を対象に、三鷹市役所の住民基本台帳を閲覧する方法を採った。

現在利用している保護者に29部、過去に利用していた保護者に55部、地域子育て支援事業利用者と保育園近隣に在住する方に559部の合計643部を配布した。

アンケートの内容は、「属性」「普段の子育てについて」「保育園での地域子育て支援事業について」「延長保育・年末保育について」「一時保育について」「自由記述」の6類で構成したものである。

第3節 調査方法と時期

現在、通常の保育を利用している保護者には、園よりアンケート用紙を直接配布し、直接園に提出してもらった。他の対象者に関しては郵送し、再び園に返送してもらった。いずれも配布時期は2004年10月中旬～下旬、回収時期はおおむね同年11月末までとした。

第2章

第1節 みたか小鳥の森保育園の概要

1982年に開設し、1988年より地域の子育て支援として、地域の親子を受け入れ、育児相談も含めての公開保育を始めた。離乳食の講習会、わらべうた、絵本の読み聞かせ、病気についてなどの育児講座に、当初より取り組んできた。

◇利用時間：7：00～19：00（18：00からは延長保育）

◇受入年齢：生後8週～3歳未満

◇職員数：17名（うち、保育士12名）

◇入所定員：0歳…9名 1歳…10名 2歳…12名

◇地域子育て支援事業：

- ・ 体験保育一月2回。園に親子で来てもらい、その年齢の子ども達と一緒に遊んだり、食事をしたりする。
- ・ 出前保育一年6回。保育園以外の場所（コミュニティセンターや近くの公園）などで一緒に遊ぶ。
- ・ 育児講座一年6回。保育園で育児に関する話をする。これまでは、「わらべうたであそぼう」「離乳食の話」「スキンケアの話」「歯の話」「子どもにとって良い靴、良い服の選び方」等といったテーマで話をしている。
- ・ 育児相談—育児相談、入園相談。園長、保育士、看護師、栄養士が、それぞれの相談内容に応じて対応している。
- ・ 情報提供—地域新聞を発行して地域子育て支援事業の案内を知らせたり、ホームページを開設したりして情報提供をしている。
- ・ 絵本貸し出し—保育園の絵本を貸し出している。
- ・ 卒園児・地域の児童生徒との交流—卒園児の入学を祝う会を行い、また地域の中学・高校、フリースクールとも連携を取り、児童生徒の保育体験の機会を提供している。
- ・ 行事への招待—夏の夕涼み会、秋のバザー等で地域の方に楽しんでもらっている。

（以上、2004年7月現在）

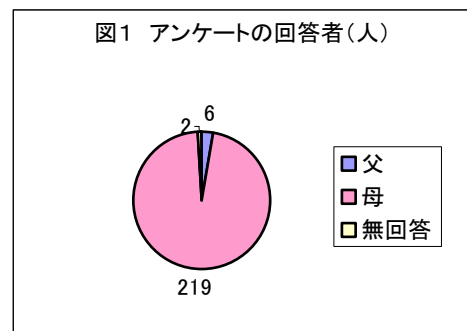
第3章 調査結果

調査票は643部配布し、227部の回答票を得た。
回収率は35.3%であった。

A. 回答者の属性

A-1 アンケートの回答者

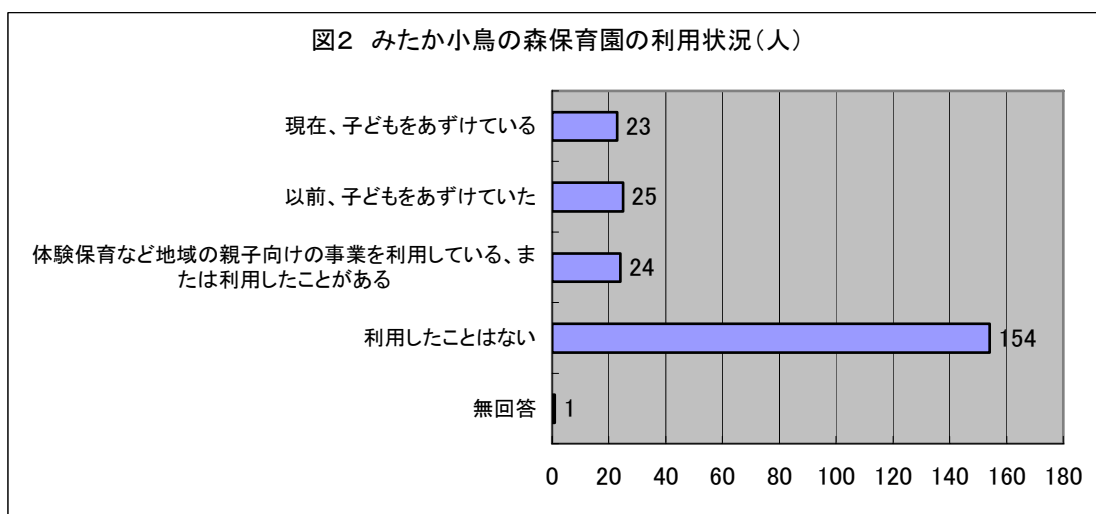
図1は、アンケートの回答者の結果であるが、「母」が96.5%の219人と圧倒的であった。「父」が回答し



てくれたのは 2.6%の 6 人でわずかである。子育て支援サービスを考える主体が、依然として母親中心であることを表すものであると同時に、回答結果の考察には、母親を中心とする内容であることを考慮に入れる必要がある。

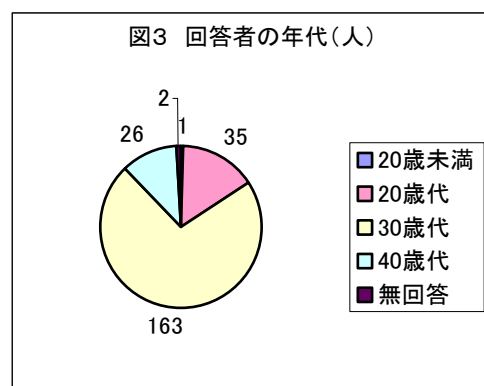
A-2 みたか小鳥の森保育園の利用状況

図 2 は、回答者の小鳥の森保育園の利用状況であるが、これまでに何らかの形で小鳥の森保育園を利用したことのある人はそれぞれ 10%程度で、小鳥の森保育園とはこれまで関わりのなかった人が 154 人の 67.8%である。



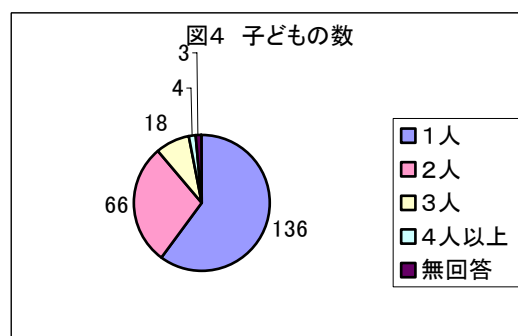
A-3 回答者の年代

図 3 は回答者の年代であるが、30 歳代が 163 人の 71.8%と最も多くなっており、次いで、20 歳代が 35 人の 15.4%となっている。20 歳未満という回答者も 1 人だけいた。



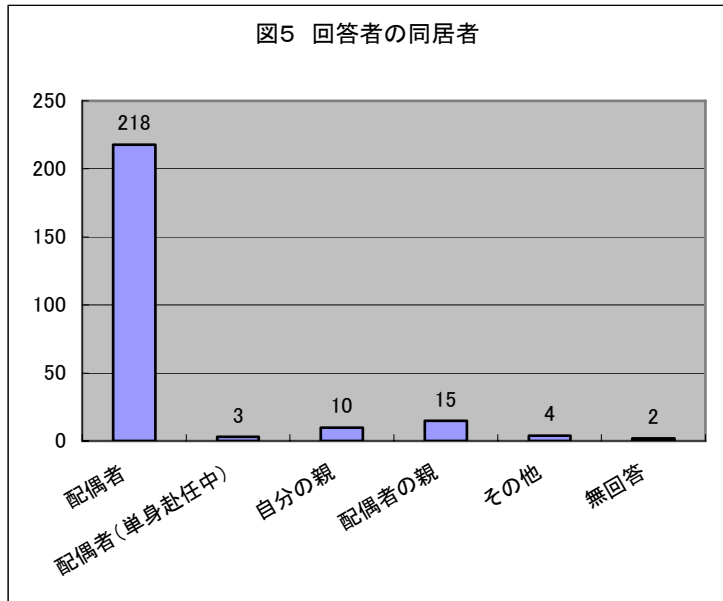
A-4 子どもの数

図 4 は回答者の子どもの数である。「1人」が 59.9%の 136 人と最も多くなっている。続いて、「2人」が 29.1%の 66 人、「3人」が 7.9%の 18 人となっている。



A-5 回答者の同居者

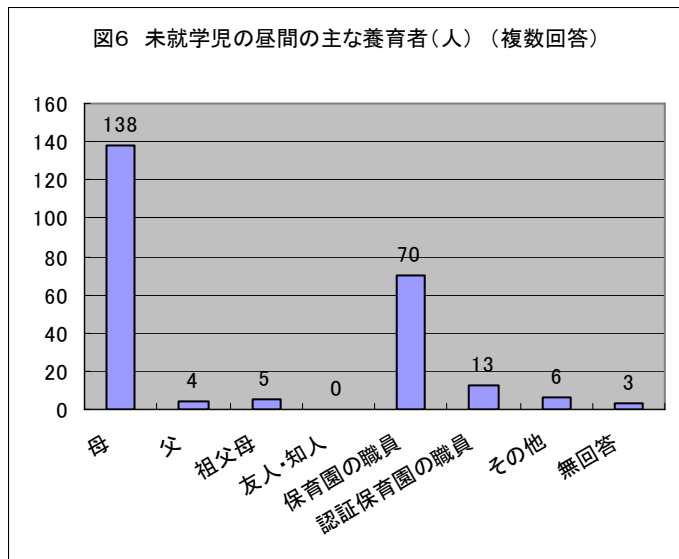
図5は、回答者の同居者であるが、配偶者と同居しているという人が96.0%の218人で、ほとんどの人が配偶者と同居していることがわかる。なお、同居者は「配偶者」のみという人も80%を超えていたことと、図4の子どもの数から、家族構成は、父母と子どもも合わせて3～4人の核家族が多いことがうかがえる。



A-6 未就学児の昼間の主な養育者

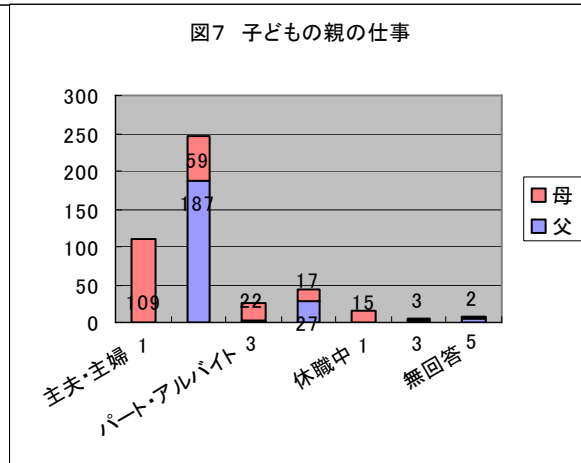
図6は、未就学児の昼間の主な養育者についてであるが、「母」が138人と60%を超えて最も多くなっている。保育園と認証保育園に預けている人は、合わせると30%を超えている。

また、「その他」の項目の回答者のうち、4人が「幼稚園の職員」と記述しており、他2人は「職場の保育所」と「認可外保育園」が1人ずつであった。



A-7 子どもの親の仕事

図7は子どもの親の仕事について、父と母それぞれについて回答してもらった結果である。父親はほとんどが何らかの形で仕事をしている。母親の場合は「主婦」の割合が50%以下となっており、「休職中」(で主婦)とあわせても54.6%と半分を少し超えている程度である。なお、



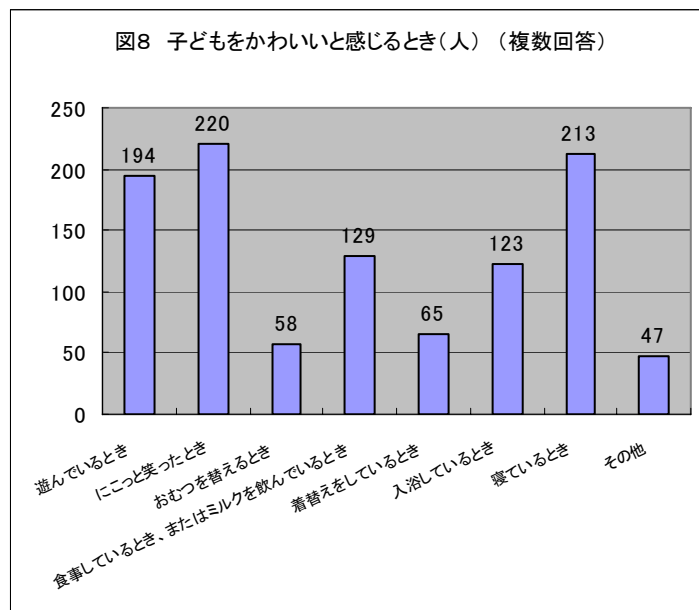
休職中も入れると、現在何らかの形で職を持っている人は 49.8%となり、専業主婦と半々である。

図 6 の未就学児の昼間の主な養育者とあわせて考えてみると、何らかの形で仕事をしている母親の割合が 40%を超えているのに対して、母親以外が子どもをみている割合が 40%に達していない。仕事をしながらも自分で子どもをみている母親が少なからず存在することがわかる。

B. 普段の子育ての様子について

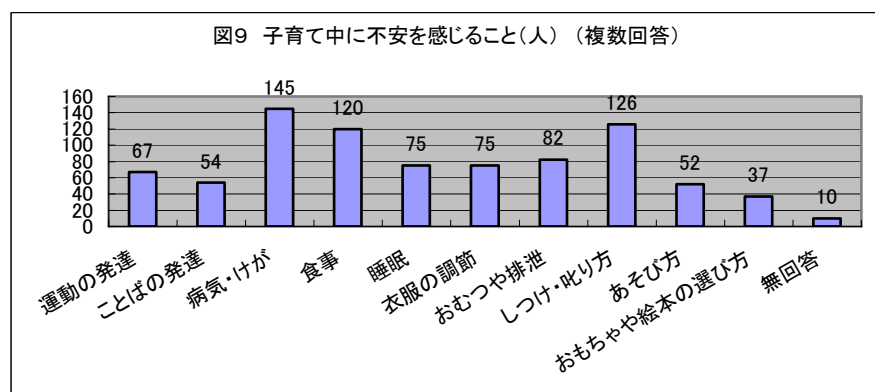
B-1 子どもをかわいいと感じるとき

図 8 は、子どもをかわいいと感じるときはどんなときか、と質問した結果である。ほとんどの親が「にこっと笑ったとき (96.9%)」と「寝ているとき (93.8%)」にかawaiiと感じると回答している。「その他」では、「話しているとき」や「保育園に迎えに行った時に駆け寄ってきたとき」といった記述をした人が数名ずついた。また、「いつもかわいい」と回答した人が 6 人いた。



B-2 子育て中に不安を感じるごとと、その時期

図 9 及び表 1 は、子育てに不安を感じるごととその時期について質問した結果である。もっとも多くの人不安を感じると回答したのが、「病気・けが」で 145



人の 63.9%であった。次いで、「しつけ・叱り方」が 126 人の 55.5%、「食事」が 120 人の 52.9%であった。50%を超えていたのはこの 3 項目についてのみである。

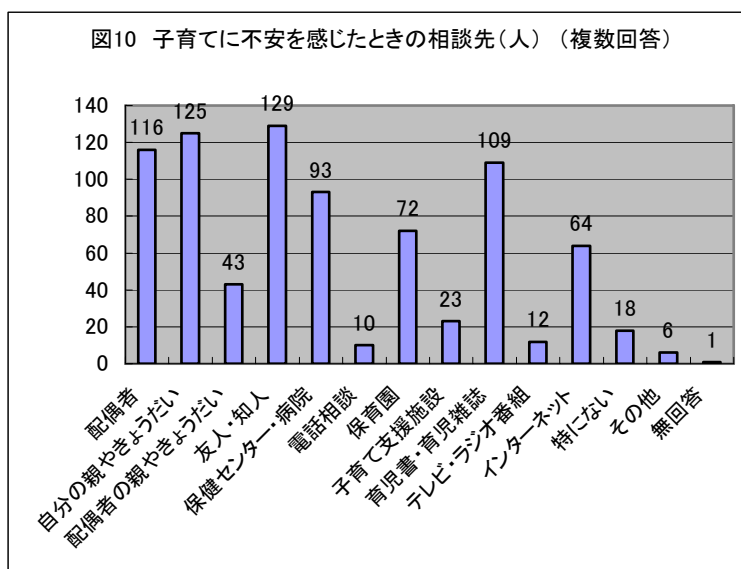
表 1 子育て中に不安を感じるごとと、その時期(複数回答)

	誕生～ 3ヶ月	3ヶ月～ 6ヶ月	6ヶ月～ 9ヶ月	9ヶ月～ 1歳	1歳～ 1歳半	1歳半～ 2歳	2歳～ 2歳半	2歳半～ 3歳	3歳以降
運動の発達	14人 (6.2%)	25人 (11.0%)	21人 (9.3%)	25人 (11.0%)	22人 (9.7%)	9人 (4.0%)	5人 (2.2%)	4人 (1.8%)	5人 (2.2%)
ことばの発達	1人 (0.4%)	0人 (0.0%)	2人 (0.9%)	21人 (9.3%)	27人 (11.9%)	21人 (9.3%)	10人 (4.4%)	2人 (0.9%)	4人 (1.8%)
病気・けが	74人 (32.6%)	69人 (30.4%)	77人 (33.9%)	79人 (34.8%)	67人 (29.5%)	48人 (21.1%)	41人 (18.1%)	30人 (13.2%)	27人 (11.9%)
食事	29人 (12.8%)	48人 (21.1%)	57人 (25.1%)	47人 (20.7%)	45人 (19.8%)	25人 (11.0%)	19人 (8.4%)	12人 (5.3%)	11人 (4.8%)
睡眠	43人 (18.9%)	29人 (12.8%)	21人 (9.3%)	25人 (11.0%)	17人 (7.5%)	14人 (6.2%)	12人 (5.3%)	11人 (4.8%)	10人 (4.4%)
衣服の調節	53人 (23.3%)	49人 (21.6%)	28人 (12.3%)	15人 (6.6%)	14人 (6.2%)	8人 (3.5%)	4人 (1.8%)	2人 (0.9%)	2人 (0.9%)
おむつや排泄	23人 (10.1%)	19人 (8.4%)	16人 (7.0%)	10人 (4.4%)	19人 (8.4%)	22人 (9.7%)	28人 (12.3%)	19人 (8.4%)	13人 (5.7%)
しつけ・叱り方	5人 (2.2%)	8人 (3.5%)	18人 (7.9%)	33人 (14.5%)	47人 (20.7%)	50人 (22.0%)	57人 (25.1%)	41人 (18.1%)	45人 (19.8%)
あそび方	13人 (5.7%)	18人 (7.9%)	17人 (7.5%)	18人 (7.9%)	16人 (7.0%)	19人 (8.4%)	16人 (7.0%)	10人 (4.4%)	14人 (6.2%)
おもちゃや 絵本の選び方	8人 (3.5%)	10人 (4.4%)	14人 (6.2%)	23人 (10.1%)	18人 (7.9%)	12人 (5.3%)	8人 (3.5%)	5人 (2.2%)	7人 (3.1%)

B-3 子育てに不安を感じたときの相談先及び情報取得先

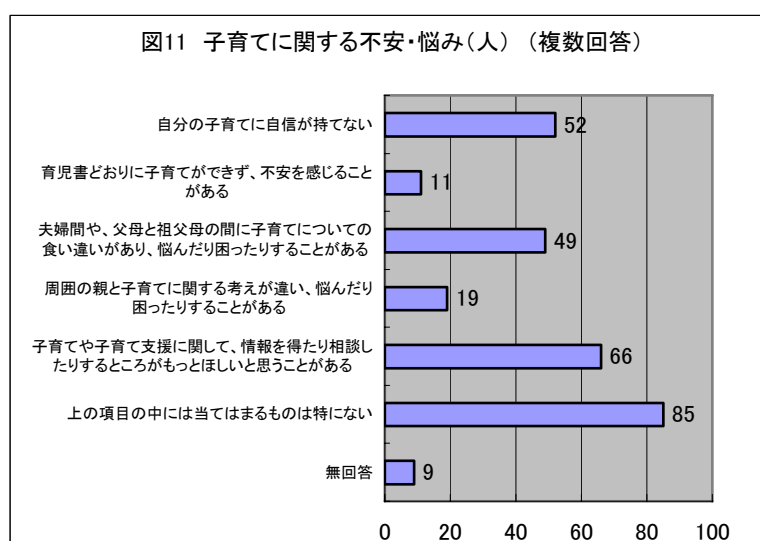
図10は、子育てに不安を感じたときに相談するところや情報を得たりするところについて質問した結果である。「友人・知人(56.8%)」「自分の親やきょうだい(55.1%)」「配偶者(51.1%)」と回答した人がそれぞれ50%を超え多くなっている。身近な人に相談している人が多いことがわかる。しかし、「育児書・育児雑誌」と回答した人も48.0%と半数近くになっており、さらにその中には、「育児書・育児雑誌」のみ、あるいは「インターネット」のみ等、人以外の項目にしか回答していない人もいた。「特にない」と回答した人も7.9%と少なからずおり、気軽に相談できる人物が周囲にいない人もいることがわかった。

また、配偶者と同居している人がほとんどであるにもかかわらず、必ずしも不安を感じた際の相談相手とはなっていないという様子もうかがうことができる。



B-4 子育てに関する不安や悩み

図11は、子育てに関する不安や悩みについて質問した結果である。全体数からみれば、特に高い割合となっているものはない。しかし、「周囲の人との間で子育てに関する考えが違い、悩んだり困ったりすることがある」という回答などは、「自分の子育てに自信が持てない」状況を背景に表面化すると考えることができよう。



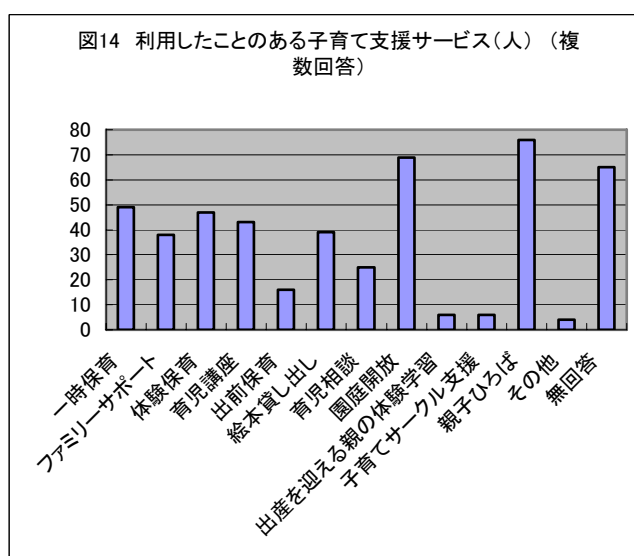
4 子育てに関する悩み・不安>と<B-5 子育てと仕事について>をクロス集計したものであるが、

子育てと仕事について特に悩みのない人は設定した項目についても不安や悩みはないと回答している。そして、子育てと仕事の両立に悩んでいる上に、家族や周囲の人との間でも悩まされている人がいることがわかる。

C. 子育て支援サービスについて

C-1 利用したことのある子育て支援サービス

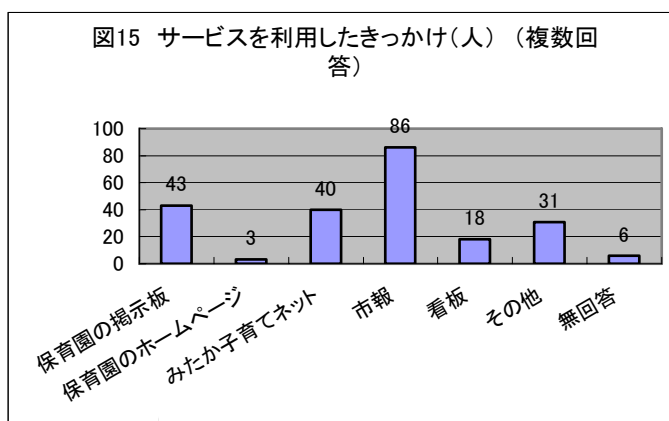
図 14 は、三鷹市内で行われている子育て支援サービスについて、利用したことのあるサービスについて質問した結果である。「園庭開放」と「親子ひろば」を利用したことのある人が、ともに 30%を超え、設定した項目の中では高い割合となっている。子どもを安心して遊ばせることのできるサービスを利用している人が多いということが分かる。



また、無回答者は 65 人の 28.6%であったが、その中で、サービスを利用したことはないと言った人が 19 人いた。無回答者の中には、書いてくれた人以外にもサービスを利用したことのない人は多いと考えられる。

C-2 サービスを利用したきっかけ

図 15 は、子育て支援サービスを利用したきっかけについての結果である。「市報」を見てサービスを利用したことがある、と回答した人が 50%を超えてもっとも多い。「その他」の回答の中には、「児童館のはり紙」「病院のはり紙」「保健師から」「市役所から」といった記述があった。



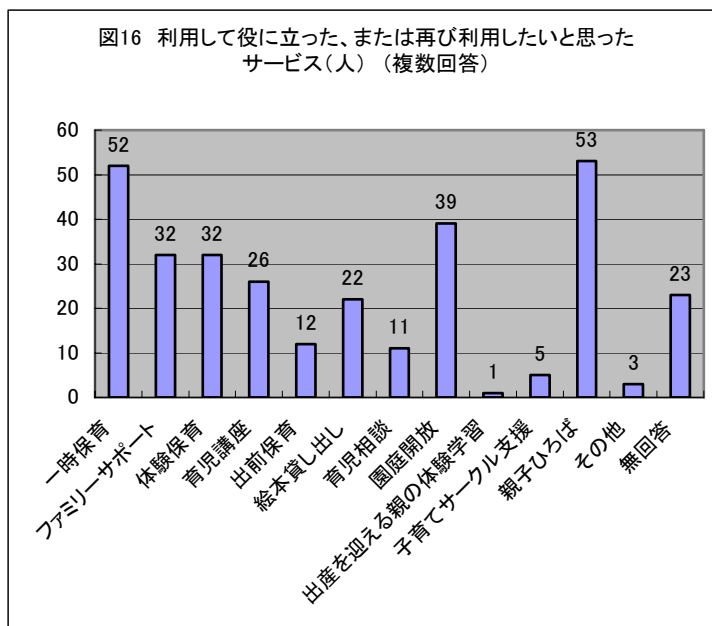
また、「友人・知人から」という項目は設定していなかったが 9.3%の人が記述していた。設定していればもっと多かったことが推測される。

C-3 利用して役に立った、または再び利用したいと思ったサービス

図 16 は、C-1 で利用したことのあると回答したサービスのうち、利用して役に立ったもの、または再び利用したいと思ったサービスについて質問した結果である。

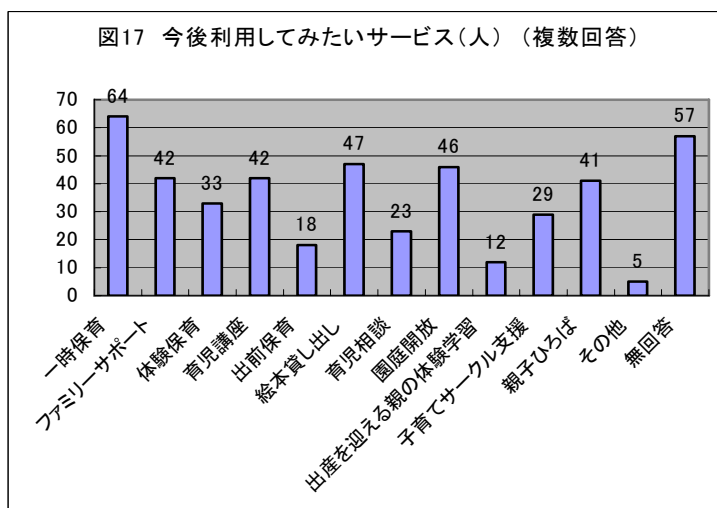
図 12 の結果と同様にこちらでも「親子ひろば」が 32.7%と最も高い割合を示している。

「一時保育」は利用した人全員が利用してよかった、または再び利用したいと思ったと回答している。「親子ひろば」に比べ、「園庭開放」はやや割合が下がっている



C-4 今後利用してみたいサービス

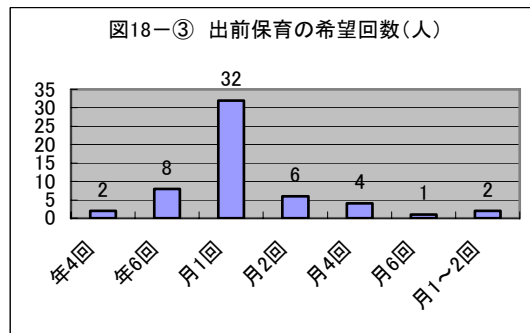
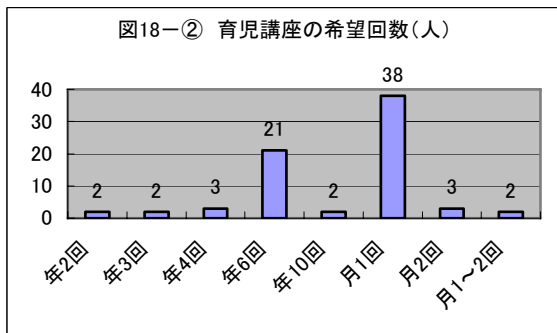
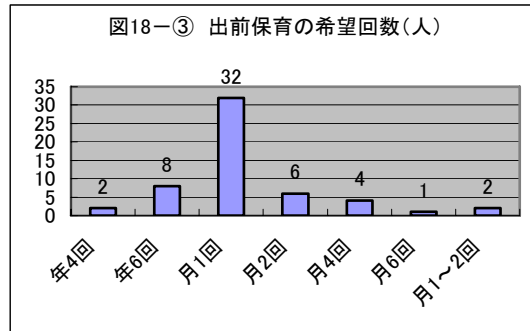
図 17 は、これまで利用したことのないサービスのうち、今後利用してみたいサービスについて質問した結果である。全体的に特に割合が高いものはないが、もっとも多くの人々が利用してみたいと考えているサービスは「一時保育(28.1%)」



である。次いで、「絵本貸し出し（20.7%）」「園庭開放（20.2%）」となっている。

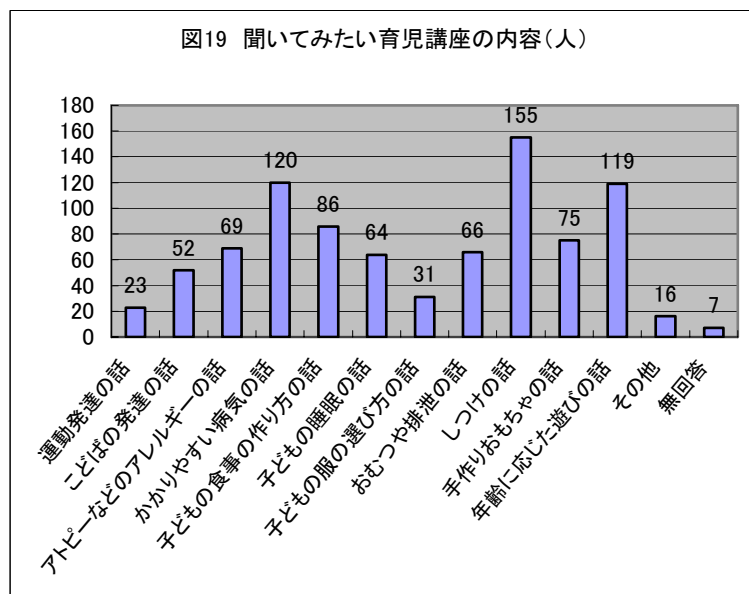
C-5 体験保育・育児講座・出前保育の希望回数

図18-①から図18-③は、体験保育・育児講座・出前保育それぞれについて希望回数について質問した結果である。「特に希望はない」「わからない」と回答した人がそれぞれ50%を超えていたが、回数を記入してくれた中で見ると、体験保育では「月2回」が42人、「育児講座」では「月1回」が36人、出前保育では「月1回」が32人とそれぞれ最も多かった。



C-6 聞いてみたい育児講座の内容

図19は、聞いてみたい育児講座の内容について質問した結果である。「しつけの話」と回答した人が68.3%の155人と最も多く、次いで「かかりやすい病気の話(120人、52.9%)」「年齢に応じた遊びの話(119人、52.4%)」と回答した人が多い。また、「アトピーなどのアレルギーの



話」「子どもの食事の作り方の話」「手作りおもちゃの話」と回答した人は、それぞれ 30%を超えている。

多くの項目では、B-2で回答してもらった、子育て中に不安を感じることに同じような傾向が見られたが、B-2では<遊び>に関する項目を回答した人はそれほど多くなかったのに対して、こちらの設問では高い割合となっている。<遊び>に関してはそれほど不安を感じているわけではなくても、情報としてはもっと得たいと思っている人が多いと考えられる。

D. 延長保育・年末保育について

D-1 延長保育の利用希望

表 2 は延長保育の希望について質問した結果である。平日については、「毎日必要」と回答した人が 36.5%、「時々

表2 延長保育の利用希望

必要」と回答した人が 42.7%である。多くの人が平日の延長保育を必要としていることがわかった。

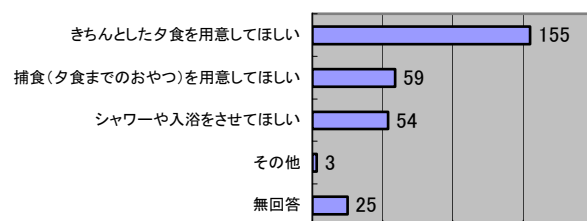
土曜については「必要」と回答した人は 40.1%である。

		19時まで	20時まで	21時まで	21時以降
平日	毎日必要	38人	30人	12人	3人
	時々必要	43人	38人	12人	4人
	必要なし	28人			
	無回答	19人			
土曜	必要	55人	19人	13人	4人
	必要なし	82人			
	無回答	53人			

D-2 19時以降の延長保育への要望

「きちんとした夕食を用意してほしい」と回答した人が 155 人の 68.3%と多かった。

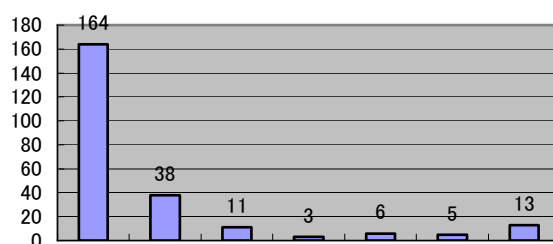
図20 19時以降の延長保育への要望(人) (複数回答)



D-3 年末の保育について

図 21 は、年末の子どもの保育はどうするかについて質問した

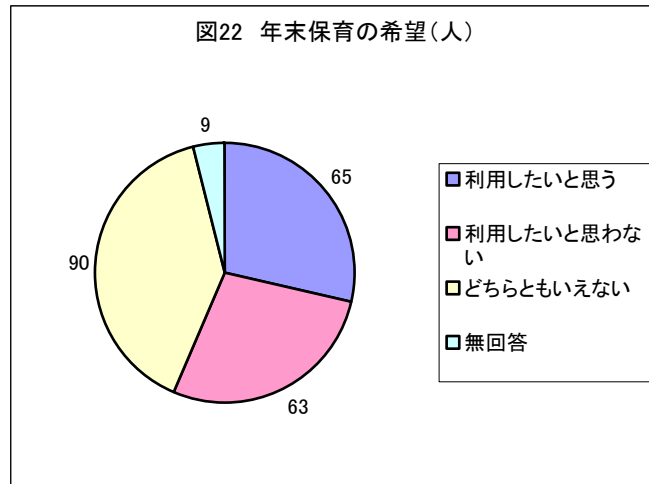
図21 年末の保育について(人) (複数回答)



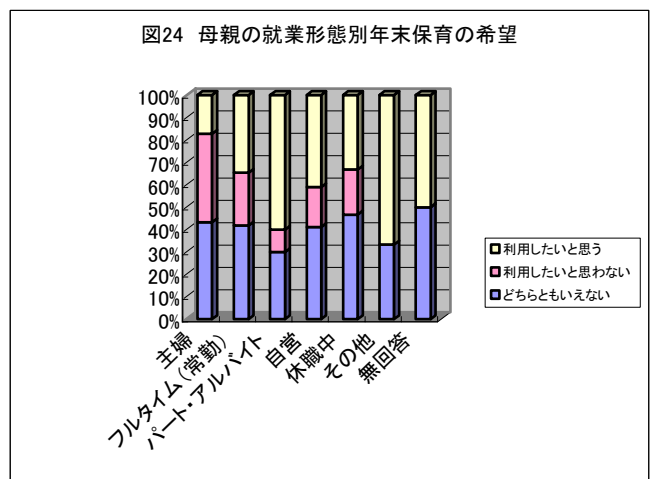
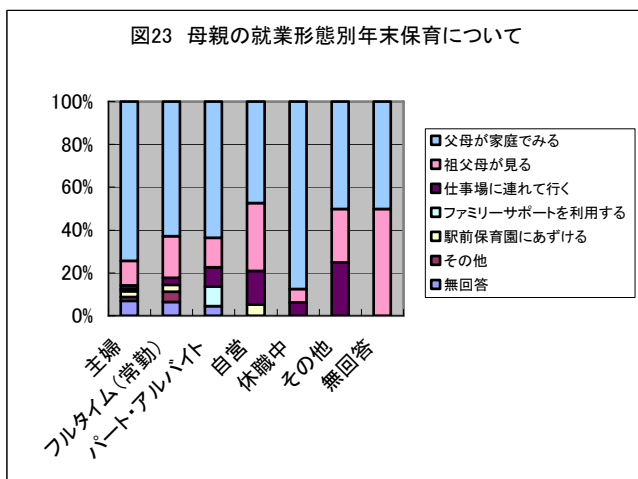
結果である。「父母が家庭で見る」と回答した人が72.2%の154人と多かったが、年末でも子どもを預ける必要のある人も少なからずいる。自由記述にもあったが、サービス業や自営業の人にとっては、保育園が休みだと年末の保育に困る人もいるようだ。「その他」の回答の中には、「他市の保育園に申し込む」「一時保育を利用する」「親戚に見てもらおう」という記述があった。

D-4 年末保育の希望

図22は、年末保育のサービスがあったら利用したいか、という質問の結果である。「どちらともいえない」と回答した人が39.6%の90人と最も多いが、「利用したいと思う」が65人にのぼっている点も決して看過できない。



なお、図23及び図24は母親の就業形態別に年末保育について表したものである。母親が仕事をしている家庭では、「父母が家庭でみる」と回答した人の割合は、主婦に比べて低くなっている。また、年末保育の希望は、母親が仕事をしている場合に利用したいと考えている割合が高くなっている。

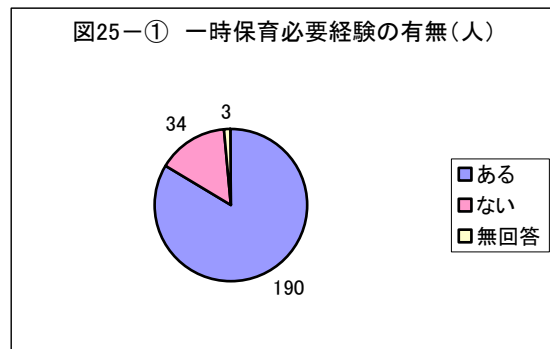


E. 一時保育について

E-1 一時保育の必要経験について

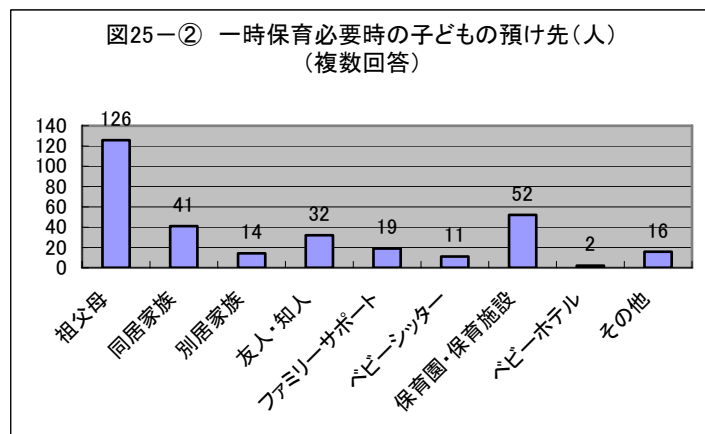
図 25-①はこれまで急用やリフレッシュのために、子どもをみてもらいたいと思ったことはありますか、という質問の結果である。そして図 25-②は、「ある」と答えた人に、その時

誰に子どもをみてもらったか、という質問をした結果である。これまで、急に子どもをみてもらう必要が生じたことがあるという人が 83.7%の 190 人ととても多い。緊急の場合であると保育園や保育施設は難しいということからか、祖父母に預けた人が最も多い。



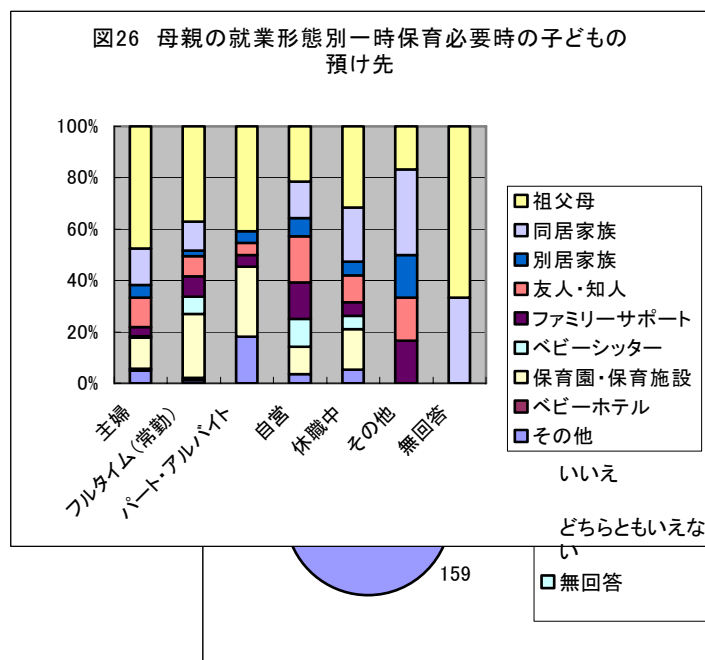
「その他」の回答者の中には、「用事をあきらめた」「誰にも見てもらわなかった」等、自分でどうにかした、というような人が何人かいた。自由記述に一時保育に関する要求が高いことや、今後利用したいサービスで一時保育が多いことから、誰かに預けた、と回答した人の中にも、用事があっても自分で何とかせざるを得なかったことがある人、我慢せざるを得なかったことがある人は多いと考えられる。

また、図 26 は母親の就業形態別に子どもの預け先を表したものである。主婦では家族や友人・知人に預けている割合が高いが、母親が働いている場合においてはファミリーサポートや保育園・保育施設など、社会資源を活用している人の割合が主婦に比べて高くなっている。



E-2 みたか小鳥の森保育園で の一時保育の希望

図 27 は、現在一時保育を行っていない小鳥の森保育園でも一時保育を行ってほしいか、という質問の結果である。「はい」と回

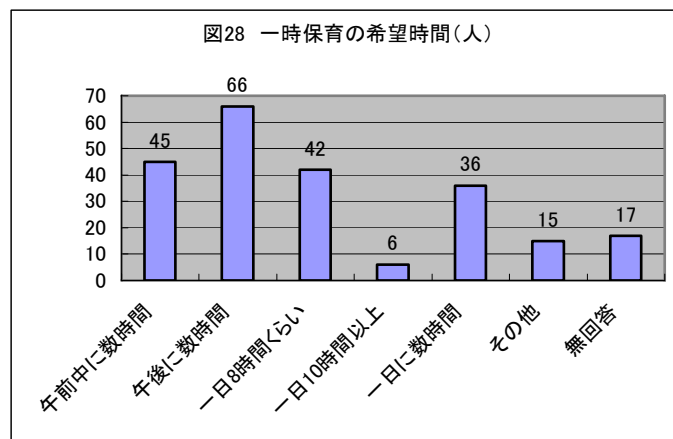


答した人は 70.0%の 159 人と多い。それだけ一時保育の要求が高いと考えられる。しかし「どちらともいえない」と回答した人の中には、自由記述の回答と合わせて考えると、一時保育の必要性は感じていても、一時保育をすることによる他の園児への影響を心配したり、また自分の子どもを慣れない環境に置くことを心配したりしている人が多いのではないかと推測される。

E-3 一時保育の希望時間

図 28 は、一時保育を利用するなら一日どれくらい預けたいか、という質問の結果である。一日のうちで数時間と回答している人が約 65%となり多くなっている。これらの人は、自分の時間を作りたい人や、他のきょうだいの用事のための時間を作りたい人が多いのではないかと考えられる。

「一日 8 時間くらい」や「一日 10 時間以上」と長時間を回答している人も合わせると 20%いるが、これらの人の中には、パートなど仕事のために、という人が多いのではないかと考えられる。



F. 自由記述 (主要な回答のみ)

最後に子育てや子育て支援に関することについて、自由記述の欄を設けた。以下は、その記述を主要だと思われるもののみ、抜粋し分類したものである。

なお () 内の数字は人数である。1 人のものに関しては表記していない。

1) 一時保育について

- ・ 一時保育をしてくれる施設が近くにほしい。(4)

- ・ もっと気軽に利用できると思う。(場所や手続き、理由の面で) (5)
- ・ 一時保育サービスを利用したいと思う時は、前もってわかっている時より緊急時が多い。急用の際に預けられる施設がほしい。(2)
- ・ 他のきょうだいも病気になったときに、病院に連れて行くため一時保育してもらいたい。(5)
- ・ 自分の病気のとくに預けたい。(2)
- ・ 時には数時間でも良いので、一人でゆっくり過ごしたい。(4)
- ・ 就職活動のため、週1～2回でも1日預かってもらえると助かる。
- ・ 土日や休日に一時保育をしてくれるところがほしい。(2)
- ・ ちょっとした用事のとくに預けられるところがなくて不安である。
- ・ 空きがあれば当日でも受けつけてくれるところがほしい。
- ・ 他の子のことで用事がある時に利用したい。(2)
- ・ 慣れない環境の一時保育に預けることで、子どもに怖い思いをさせてしまうのではないか、そうすることでますます親から離れられなくなるのではないか、という懸念を強く持っている。
- ・ 保育園に預けている立場では、入れ替わり人が出入りする中の保育では心配。逆に、一時保育のみする立場では、保育園だと、食事・睡眠・遊びの面でとても安心。
- ・ 保育園で一時保育をすることで、保育者の仕事が増えて園児達にしわ寄せがくるようなことがあると、いつも通園している園児の親は心配かと思う。

2) 延長保育について

- ・ 長時間の保育は子どもに申し訳ないと思うが、仕事を続けていく上で時には預けざるをえない。(2)
- ・ 夕食付の延長保育をしてもらいたい。
- ・ 毎日延長保育を利用して子どもとのスキンシップが平日に少なくなりすぎるのもどうかと思う。
- ・ 急な残業のときも遅くまで預かってもらえると助かる。
- ・ すべての保育園で延長保育を実施してほしい。
- ・ 仕事のためだけではなく、安全性や遊び方、人とのふれあいなどからしても延長保育はともよいと思う。

3) 病児保育について

- ・ 病児・病後児保育の施設を増やして欲しい。(9)
- ・ 保育園の中に、病児一時保育があれば助かる。薬も場合によっては飲ませたり、つけたりしてもらえると助かる。

4) 地域子育て支援事業について

- ・ 親同士のつながりが持てる機会、企画がもっとあるといいと思う。(5)
- ・ 保育園は子どもを預けていないものにとっては近寄りがたいので、もっと気軽に立ち寄れる場所になればありがたい。(4)
- ・ 土日の子育て支援サービスがあるなら利用したいと思う。(3)
- ・ 育児講座などは、保育付きで平日の夜か土日に行ってほしい。
- ・ 子育ては孤独になりがちなので、いろいろな人と関われるほうが、親だけでなく子どもにとっても良い面が多いと思う。
- ・ 普段でも公園などで会ったときに一緒に遊んでほしい。
- ・ 相談は日時を決めてくれたほうが利用しやすい。
- ・ 園庭開放は助かる。公園と違って囲われているので、比較的気楽に見守っていただける。
- ・ ちょっとしたことを聞ける場がたくさんあるといいと思う。
- ・ 子育て支援サービスによって、ふだん通園している子どもへの保育士の数が減るのでは困る。

5) 子どもの遊び場について

- ・ 子どもを安心してあそばせる公園が近くにほしい。(3)
- ・ 保育園に通っていなくても、同じくらいの子どもと一緒に遊べる場所がほしい。(3)
- ・ 土日に雨が降っても遊べる場所がほしい。
- ・ 乳児のための室内できれいな遊び場が近くにほしい。

6) 子育て・仕事の環境について

- ・ 保育園や子育て支援サービスが充実するのも良いと思うが、父母の働く環境がもっと変わればいいのと思う。
- ・ 子どものための病気の有休などの制度も整い、周囲に子どもの病気のときに休むのは当然という雰囲気が広がってほしい。

- ・ 男性の意識がもっと変わってくれば良いと思う。
- ・ まだまだ働く母親に対して、まわりの目は厳しい。子育て支援サービスを充実させるとともに、そのメリットもたくさん宣伝して、社会の目を少しずつでも変えていってほしい。
- ・ 親が育休を取りやすくしてほしい。
- ・ ベビーカーでの外出は、路面が悪かったり、車・自転車とのすれ違いに怖いと思うことがよくある。

7) その他

- ・ 保育園不足を解消して欲しい。(11)
- ・ フルタイム以外でも市の保育園に入園できる機会を広げて欲しい。
- ・ 保育園や子育て支援サービスに関して情報を得る場が少ない。もっと情報や情報を得る場が欲しい。(6)
- ・ 園で遊ばせてもらえる情報を、市報だけでなく、直接文書等で送ってもらえると落ち着いたときに読めるのでありがたい。
- ・ 子育てにかかわる経済的負担が大きい。(2)
- ・ 専業主婦だと、毎日子どもと何をして遊ぼうかと考えてしまう。
- ・ 子どもと遊ぶことがこんなにむずかしいと思わなかった。
- ・ 他のお母さん達がどんな風に子どもと一日を過ごしているのか知りたい。
- ・ 子育てをされていて感じるのは、自信がもてない気持ち。相談すると、いい加減な答えが返ってくるが多かったので、話を聞いてくれる人が欲しかった時期はある。
- ・ サービス業なので、土日祝日、年末年始の保育に困っている。(2)
- ・ 保育園の保育士さん達には日常励まされ感謝している。保育士さんの言葉で気持ちが軽くなったことが何度もあった。(3)

自由記述では一時保育についての意見が最も多く書かれていた。家の近くに、気軽に利用できる一時保育の施設を必要としている人が多いことがうかがえる。また、病児・病後児保育施設についても必要としている人が多いことがわかった。この意見は特に仕事をしている人に多かった。

地域子育て支援事業に関しては、親同士のつながりを持てるようなサービスを希望している人が多い。また、現在、子育て支援サービスの多くは平日の昼に実施されているが、土日や夜間も実施してくれるなら利用したいという記述もあり、働く親にとっては現在の地域子育て支

援事業は利用しにくくなっていることがわかる。また、保育所利用の経験のない専業主婦層には、保育所を拠点とする多様なサービスにもまだ距離感のあることがうかがえる。

その他、直接地域子育て支援サービスには関わらない内容のものとしては、職場を含む社会の子どもや子育てをめぐる環境改善を求める声や、保育所不足の解消を求める声があがっている。

なお、保育所の職員に対して感謝の気持ちを表している記述もみられた。

第4章 考 察

第1節 子育ての実態と子育て支援ニーズの現況

①母親の就労状況による子育て状況の二層化

表1は、子どもの母の仕事と子どもの昼間の主な養育者の結果をクロス集計したものである。なお、ここで母親しか取り上げていないのは、昼間の養育者とアンケート回答者がともに、圧倒的に母親が多いという事実を考慮したためである。表1から、「フルタイム」の89.9%、「パート・アルバイト」の63.6%、そして「自営」の76.5%は、子どもを保育所または認証保育所に預けていることが分かり、これらの層については子育ての社会化がある程度浸透していると考えてよい。しかし、それ以外では、母親に著しく傾斜した養育負担が、今日なお子育ての実態であることを明らかにしている。

表1 子どもの母の仕事と子どもの昼間の主な養育者(%)

		子どもの昼間の主な養育者						
		母	父	祖父母	保育園の職員	認証保育園の職員	その他	無回答
子どもの母の仕事	主婦	100	1.8	-	-	-	1.8	-
	フルタイム(常勤)	5.1	-	5.1	74.6	15.3	1.7	-
	パート・アルバイト	36.4	4.5	9.1	59.1	4.5	9.1	-
	自営	23.5	-	-	64.7	11.8	-	-
	休職中	80	6.7	-	13.3	6.7	-	-
	その他	66.7	-	-	-	-	33.3	33.3
	合計	60.8	1.8	2.2	30.8	5.7	2.6	1.3

②子育て状況の二層化＝育児相談と情報源に格差が生まれている

表2は、子どもの母の仕事と、子育てに不安を感じたときの相談先及び情報取得先についてクロス集計したものである。何らかの形で仕事をしている、保育所利用層の人たちについては、相談先に「保育園」と回答する人の割合が最も高い。フルタイムの人の中では66.7%の38人、パート・アルバイトの人の中では57.1%の12人、自営の人の中では50.0%の8人となっている。保育所が日々の保育の拠り所であるとともに、何か困った際の相談先や情報取得先として大きな役割を果たしていることがうかがえる。一方で、仕事をしていない人たちの中で高い割合を示しているのは、「友人・知人」「自分の親やきょうだい」「育児書・育児雑誌」とインフォーマルな資源である。主婦でみると、「友人・知人」69.5%、「育児書・育児雑誌」54.3%であるのに対し、「保育園」は8.6%の9人と少なくなる。これは、普段保育所を利用していない人たちにとっての、保育所における育児相談を、もっと身近でアプローチのしやすい機会として提供していく点に課題を示すものといえよう。

表2 子どもの母の仕事と不安を感じたときの相談先及び情報取得先

上段:人		不安を感じたときの相談先及び情報取得先														
下段:%		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	合計
子どもの母の仕事	主婦	59	65	23	73	45	7	9	19	57	7	26	13	5	-	105
		56.2	61.9	21.9	69.5	42.9	6.7	8.6	18.1	54.3	6.7	24.8	12.4	4.8	-	100.0
	フルタイム (常勤)	28	28	8	30	23	2	38	1	27	2	21	2	-	1	57
		49.1	49.1	14.0	52.6	40.4	3.5	66.7	1.8	47.4	3.5	36.8	3.5	-	1.8	100.0
	パート・ アルバイト	8	12	4	13	10	1	12	1	8	1	7	1	1	-	21
		38.1	57.1	19.0	61.9	47.6	4.8	57.1	4.8	38.1	4.8	33.3	4.8	4.8	-	100.0
	自営	8	7	3	4	8	-	8	-	3	-	3	1	-	-	16
		50.0	43.8	18.8	25.0	50.0	-	50.0	-	18.8	-	18.8	6.3	-	-	100.0
	休職中	10	11	4	7	4	-	4	1	11	2	6	-	-	-	15
		66.7	73.3	26.7	46.7	26.7	-	26.7	6.7	73.3	13.3	40.0	-	-	-	100.0
	その他	2	1	1	2	2	-	1	1	1	-	1	-	-	-	3
		66.7	33.3	33.3	66.7	66.7	-	33.3	33.3	33.3	-	33.3	-	-	-	100.0
	無回答	1	1	-	-	1	-	-	-	2	-	-	1	-	-	2
		50.0	50.0	-	-	50.0	-	-	-	100.0	-	-	50.0	-	-	100.0
合計	116	125	43	129	93	10	72	23	109	12	64	18	6	1	219	
	53.0	57.1	19.6	58.9	42.5	4.6	32.9	10.5	49.8	5.5	29.2	8.2	2.7	0.5	100.0	

1. 配偶者 2. 自分の親やきょうだい 3. 配偶者の親やきょうだい 4. 友人・知人 5. 保健センター・病院 6. 電話相談
7. 保育園 8. 子育て支援施設 9. 育児書・育児雑誌 10. テレビ・ラジオ番組 11. インターネット 12. 特にな
13. その他 14.無回答

③育児情報の氾濫する時代だからこそ、身近で気軽な、専門家の育児相談の充実を

保育所利用層ではない親の相談先は、保育士や医師などの専門家ではないという日常があり、ここで「友人・知人」や「育児書・育児雑誌」をもっぱら情報源とすることには、ときとして不安を拡大するリスクが伴うかも知れない。たとえば、近頃の育児雑誌は、読者から募った「体験談もの」にかなりのスペースを割く傾向があると指摘されている⁴⁾。そして、読者のさまざまな「成功談」や「失敗談」の中から、「自分に好都合な」情報と子育ての方法が「選択」されるとしても、判断基準の客観性や情報の的確性が確保されないままに、誤った方法や情報が独り歩きしてしまう問題点が残されることとなる。これがさらに、育児雑誌からの情報にた

よる「友人・知人」との「相談」の中で増幅されることになれば、親同士の話し合いのただなかで「誤った常識」が作られる危険性をはらむものと考えることができよう。情報が氾濫している現代では、育児について身近で気軽に話ができる人と機会が保障されるということと、間違いのない情報と情報に対する判断能力の育成を目的とする専門家の関与も同時に保障されるような、「育児相談」の機会がつとに重要である。

また、全体で「特にない」と回答した人もわずか 8.2%ではあるが存在する。不安や悩みを持っているのに相談先がないということは、不安や悩みが解決されないために子育て不安が高くなる要因であると考えられる。また、相談先がないこと自体が不安材料になることもあるだろう。また、図 11 にすでに示したように、「子育てや子育て支援に関して、情報を得たり相談したりするところがもっとほしいと思うことがある」と回答した人が 29.1%と 3 分の 1 近くいることや、「どの保育所でサービスを実施しているのか知りたい」と自由記述で記入していた人がいたことからわかるように、どこでどのようなサービスを実施しているかがわからないために利用できない人も多い。また、親戚や友人に相談していながら、それだけでは不十分として、相談先や情報を得る場がもっとほしいと感じている人が約 30%認められる。

このように、身近で気軽にアプローチすることが可能な、社会的で専門的な育児相談の機会保障と、積極的な情報提供が求められている。ここには、日常的に利用することがなくても、必要なときに利用できるサービスと実施場所がわかっているだけでも、子育て不安の軽減・緩和につながる意味があるのではないだろうか。

④子育て不安のベスト3－「病気・けが」「しつけ・叱り方」「食事」

次に、調査票の B-2 において、子どもに関する生活上の基本的な事柄について不安を感じるものについて回答してもらったが、無回答者は回答者 227 人中 10 人とわずか 4.4%であったことから、子育て上何の不安も感じないという親はほとんどいないことがわかる。特に不安が高いという結果が出たのは、「病気・けが(63.9%)」「しつけ・叱り方(55.5%)」「食事(52.9%)」についてであった(第 1 節図 9 参照)。子育て支援を行う際には、これらの項目に関しての支援を行うことが、子育て不安の緩和のための一助となるだろう。

⑤子育て支援サービスのニーズベスト5－「親子ひろば」「園庭開放」「一時保育」「体験保育」「育児講座」

図 1 は、利用したことのある子育て支援サービスについて、利用して役に立った、または再び利用したいと思った点について質問した結果をまとめたものである。これによると、「園庭

開放」や「親子ひろば」を利用したことがある人が、それぞれ全体の 30.4%、33.5%と多くなっている。特に「親子ひろば」は利用者 76 人のうちの 69.7%である 53 人が、「利用して役に立った、または再び利用したいと思った」と回答している。「一時保育」については、利用した人全員が「利用して役に立った、または再び利用したいと思った」と回答している。

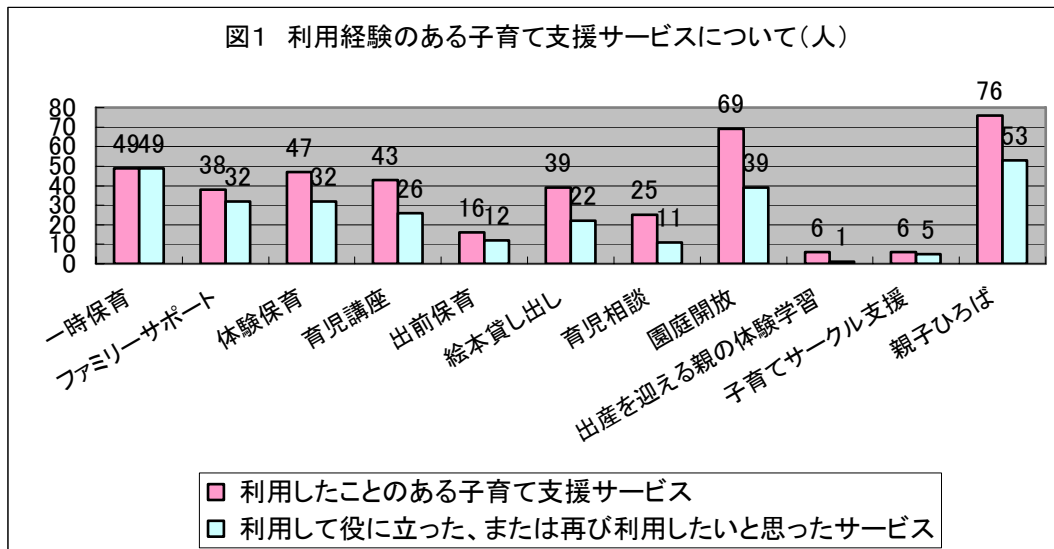
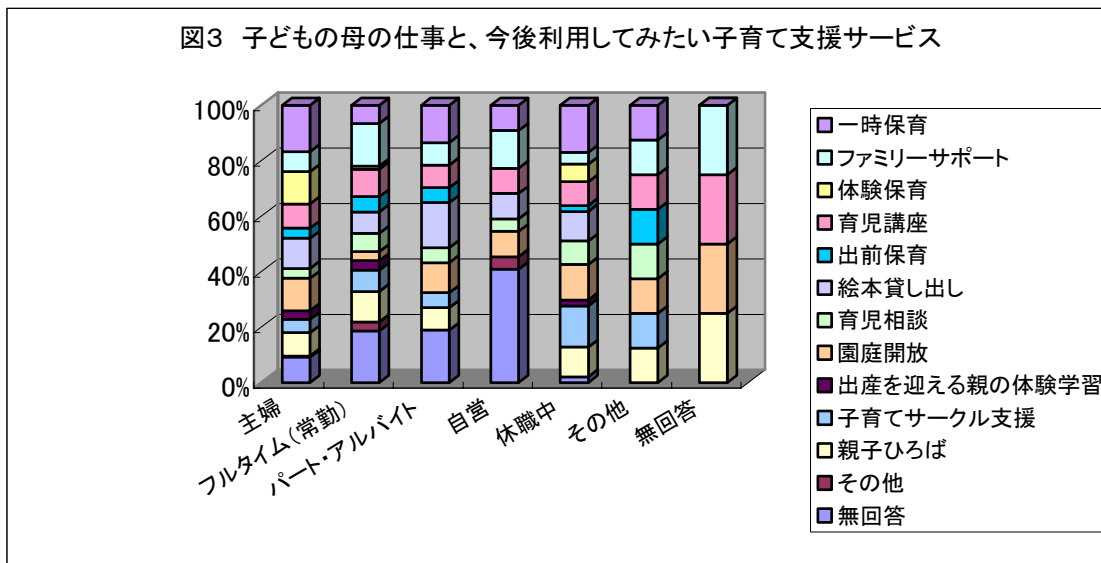
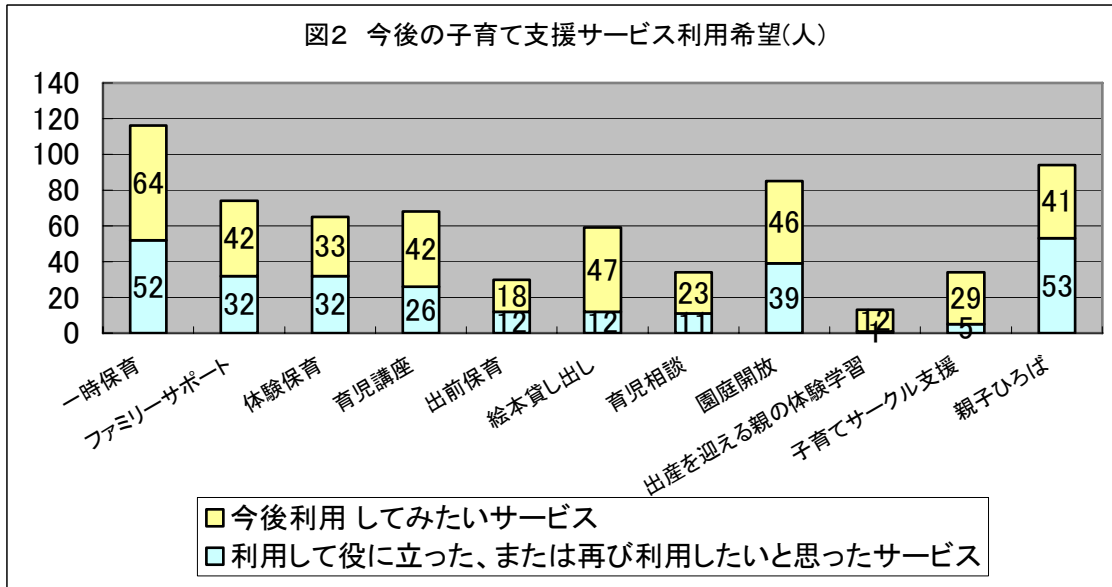


図2は利用したことがあるサービスのうち再び利用したいサービスと、利用したことのないサービスのうち今後利用してみたいサービスの結果についてまとめたものである。こちらでは「一時保育」を利用したいと考えている人が最も多い。全体のうちの半数である。そしてやはり、「園庭開放」と「親子ひろば」の希望は高い。なお、何らかの支援サービスを利用したことのある人の割合は回答者全体のうちの 71%、今後のサービス利用の希望のある人は 74%であったことから、身近な場所でのサービス提供は必要不可欠であるといつてよい。

また、サービスを利用したいと考えている人は、大体どのサービスにおいても主婦が多かった。確かに、現在の地域子育て支援サービスの利用者の多くは専業主婦である。しかし、図3は母の就業形態別の、利用したことのないサービスの今後の要望を示したものであり、これによると、仕事をしている人の中にも親子ひろばや育児講座を利用してみたいと考えている人が少なからずいることがわかる。フルタイムで働いている人の中には、土日や夜に実施してくれるなら利用したい、と記述している人もいた。一時保育やファミリーサポートを除くサービスは、主婦が利用することを想定して平日の昼に実施している保育所や子育て支援施設がほ

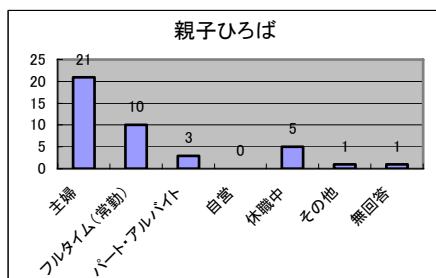
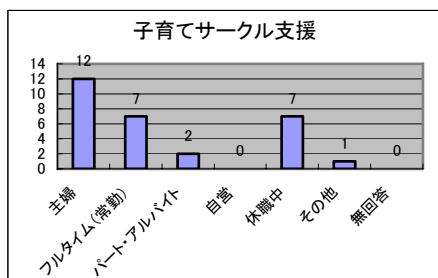
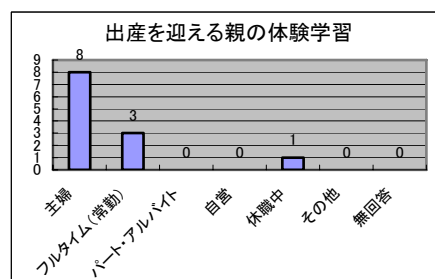
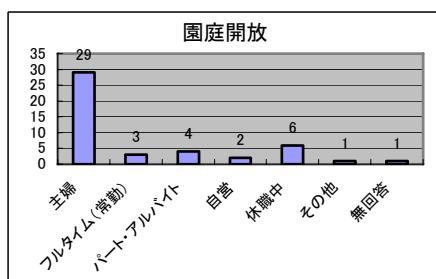
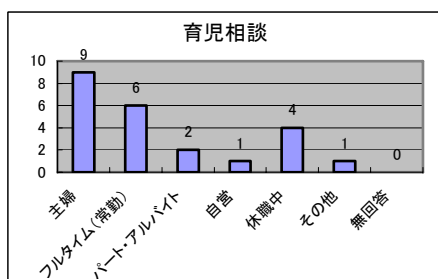
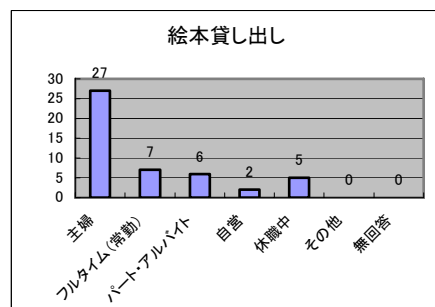
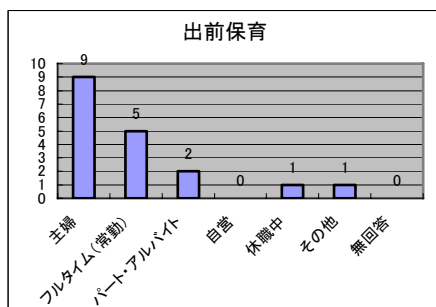
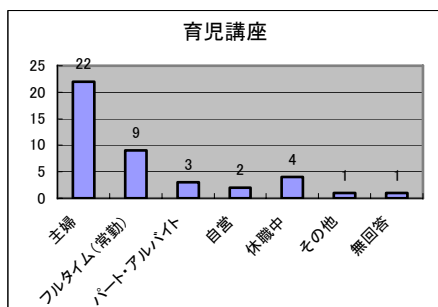
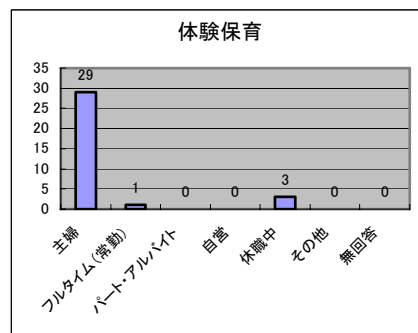
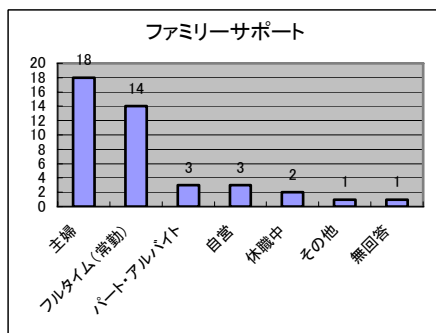
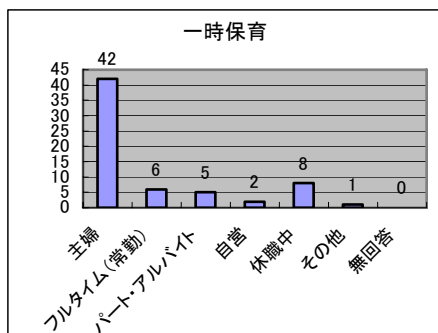


とんどだろうし、土日や夜間に実施することにはわかには困難な事かも知れない。しかし、要求としてはそういった声もあることも念頭におき、フルタイムで働いている親に対しても、何らかの形で、平日の昼に提供しているサービスと同様のサービスを提供できるような計画を構想する必要もあるだろう。

なお、相談できる場がほしいと回答している人が 30%近い一方で、育児相談を利用したいと考える人の割合は 14.9%の 34 人と少ないが、利用が少ない現状とアプローチへのイメージのなさが、ひとまずこのような回答結果として表れたものと考えることができよう。

また、自由記述において、地域子育て支援事業に関して「親同士のつながりが持てる機会、企画がもっとほしい」「保育園は子どもを預けていないものにとっては近寄りがたいので、もっと気軽に立ち寄れる場所になってほしい」「子どもを安心して遊ばせられる公園が近くにほしい」というような記述が多く見られた。これは、アンケート調査で「園庭開放」「親子ひろば」の希望が多かったこととあわせて考えてみても、近くに、子どもを安心して遊ばせることができ、なおかつ同じ年の子どもを持つ親の友人をほしがっている人が多いことの表れであると考えられる。

最後に、次の図は、母親の就業形態別に今後のサービス利用希望を表したものである。「一時保育」「体験保育」「園庭開放」については「主婦」層に特徴的な要望であるが、「フルタイム」層においても「ファミリーサポート」「育児講座」「出前保育」「育児相談」「子育てサークル支援」「親子ひろば」等のサービスに多様な要望のあることがうかがえる。



第2節 今後の子育て支援サービスの方向性

前節の考察から、今後の子育て支援サービスに求められるポイントは、次のような五点に総括することができるであろう。

- (1) 子どもを安心してあずけ、保育してもらえる身近なサービス
- (2) 親子参加型の子どもとともに遊び、遊びを学べるサービス
- (3) 同じ年代の子どもを持つ父母と地域でのつながりを深めるサービス

(4) 身近で気軽な育児相談のサービス

(5) 子育てと子育て支援サービスに関する的確で専門的な情報提供サービス

子育て支援サービスにかかわる従来からのイメージには、通常の保育所利用に代表される継続的で安定したサービス利用と、一時保育・体験保育・園庭開放などの一時的で多彩なサービス利用(「居宅支援型サービス」)とに、形式上の区分があると考えられる。しかし、これまでの考察から明らかなように、上の五点に総括されたニーズは、サービス利用の形態が継続的か一時的かにかかわらず、あらゆるサービスを通じて、地域の父母が共通に願う内容であると考えられるべきである。

もとより、これらのニーズに全面的に応えていくには専門性の高い職員の十分な配置と、園庭・施設設備等の保育条件を兼ね備えた社会資源の確保が必要不可欠である。この点で、現状のみたか小鳥の森保育園が、仮に、これらすべてのニーズに応えていくに必要な十分な客観条件を満たしていないとしても、今日の多くの父母の願いに、徐々にではあれ、着実に応える努力を重ねてこそ、保育所を拠点とする新しい地域協働型の子育てと子どもたち・父母の笑顔と安心を再構築する展望を切り拓くことができる。

以下、先に指摘した五つのポイントを念頭に置き、みたか小鳥の森保育園の、今後の事業展開に求められる要点を記す。具体的で現実的な内容であることを心がけたが、事業展開の実際には、父母・子どもたちと職員の声を反映した、より現状を見据えた内容にすべきことは言うまでもないことである。その限りでは、あくまでも、今回のアンケート調査の結果からの要点に過ぎないことをお断りしておきたい。

①延長保育の拡充について

表3は、平日と土曜それぞれについて延長保育の希望についての回答結果である(再掲)。平日においては、毎日と時々を併せた回答割合が79.3%となり、8割近い人が延長保育を希望している。その内訳では、80%以上の人の希望が「20時まで」となっているが、「21時まで」や「21時以降」という人も少なからず存在する。

土曜では必要と回答した人の割合は40.6%である。また、19時以降の延長保育への要望として、「きちんとした食事を用意してほしい」との回答は68.3%にのぼった。

全国的な状況としては、エンゼルプラン策定以降、保育所開所時間の長時間化が進み、2002年10月1日現在、11時間以上開所の保育所は全国の約半数を占めている⁵⁾。いたずらに長時間保育を蔓延させることの弊害は、子どもと親の双方に明白であるとしても、現代の多様な労働時間・就業形態の現実を前にしたとき、「よりましな子育て環境」を整備するためには延長

保育の拡充は必要不可欠であるといわざるをえない。もし、保育所で延長保育を拡充しない場合、劣悪な保育サービス利用へのシフトと子どもに対する実質的なネグレクトを誘発しかねないからである。

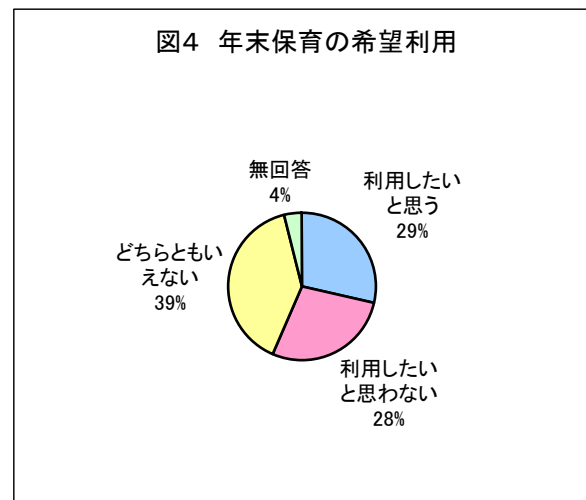
そこで、延長保育の拡充に際しては、子どもへの食事は保育所が用意し、父母はお迎えの際に自らの夕飯を持参して親子ともどもの夕餉にしていくなどの工夫の余地があるのではなかろうか。このようにして、可能な限り保育所において延長保育を拡充しつつ、親子のあり方・家庭のあり方を、保育所と父母がともに考え、話し合う機会（=日常の保育にビルト・インされた育児相談）としていくことが重要であろう。

表3 延長保育の利用希望

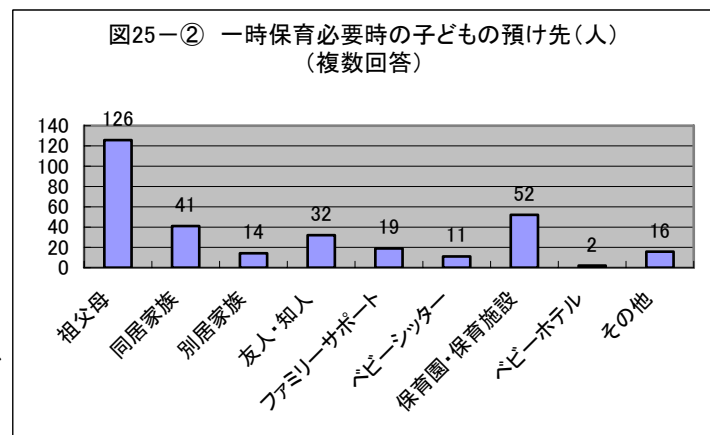
		19時まで	20時まで	21時まで	21時以降
平日	毎日必要	38人(16.7%)	30人(13.2%)	12人(5.3%)	3人(1.3%)
	時々必要	43人(18.9%)	38人(16.7%)	12人(5.3%)	4人(1.8%)
	必要なし	28人(12.3%)			
	無回答	19人(8.4%)			
土曜	必要	55人(24.2%)	19人(8.4%)	13人(5.7%)	4人(1.8%)
	必要なし	82人(36.1%)			
	無回答	53人(23.3%)			

②多様な利用形態を含む一時保育サービス・年末保育サービスの創出

一時保育については、先述したように「一時保育の必要経験」が「ある」との回答は80%と高い割合だった。また、年末保育への要望は約3割から出されている(図4再掲)。そして、このような一時的な保育の必要時における対処では(図25-②再掲)、大半が別居の「祖父母」にたよる形となっている。ここにいう「祖父母」には、三鷹市に居住する父母の実態からからいえば、相当遠距離の方も多数含まれているものと考えなければならない。



この背後には、乳幼児の子育て期にある家族の多くが、日常の一時的な保育ニーズに対応できないほどの核家族状況にあり、地縁・血縁のネットワークから疎遠または孤立していることを表している。ここに、職種・業種の特質に由来する仕事の繁忙期の問題が重なったとき、とても私的な形で対応しきれない問題ではなくなっていると考えられる。とくに、「パート・アルバイト」層に年末保育への要望の高さが認められる点は、サービス業への就業を大部分とすることからみて、フルタイム労働者との労働条件の格差を十分に推測させる。



このようにみえてくると、一時的なタイプの保育サービスの充実は重要な課題であろう。制度上の事業形態としては、一時保育と年末保育は別物であるかもしれない。しかし、家族の病気・事故等の急用の発生、冠婚葬祭、父母の休養などは年間を通じて起こりうる保育ニーズの原因であるし、職種・業種による父母の仕事・営業には繁忙期の時期とサイクルに多様性があり、年末に特殊な、一時的保育の需要であるとは限定することもできない。したがって、子育て支援を進めるサイドからは、年間を通じて、さまざまな事情による一時的な保育ニーズが地域に存在し、それにできる限り応えていくための方策を構想する必要があると指摘することができる。

ただ、通常保育と一時保育を併せた運営には注意を要するところである。それらを混合保育

にするのか、その際には子ども集団に悪影響はでないのか、あるいは「すみわけた集団」で保育するのか等々である。

この点については、2003年度に、全国保育所のうち一時保育実施保育所の割合が22.2%に達しており、幼稚園での預かり保育実施割合も(2003年6月1日現在)65.5%となっている⁶⁾ことから、一時保育に関する先行経験から十分に学ぶ必要があるだろう。また、「一時保育棟」や「一時保育スペース」のように「すみわけ型」で実施運営する場合には、生協の組合員方式などを参考に、幅広い住民からなる「一時保育サービス組合員組織」による利用と利用手続きの思い切った簡素化をはかることも一案である。

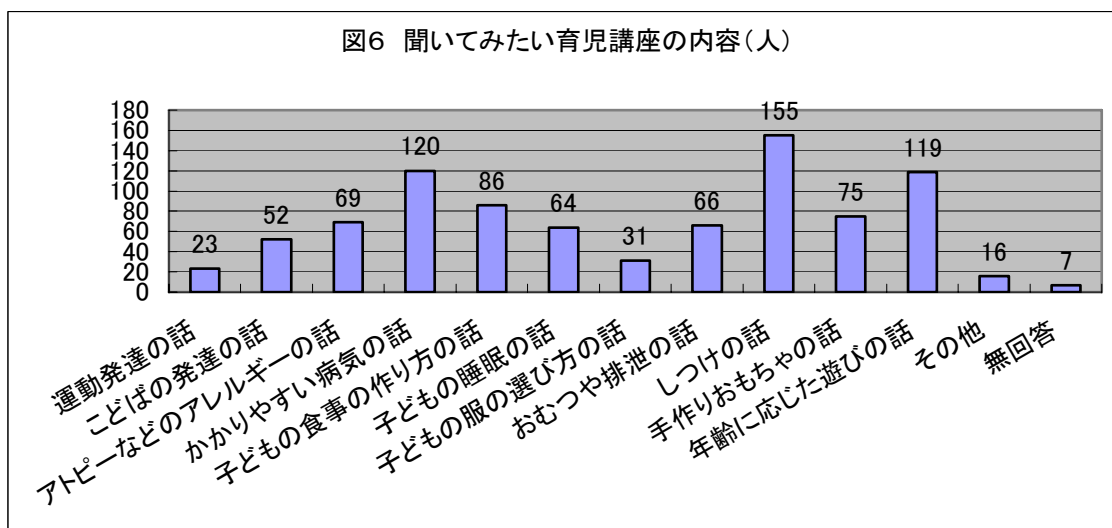
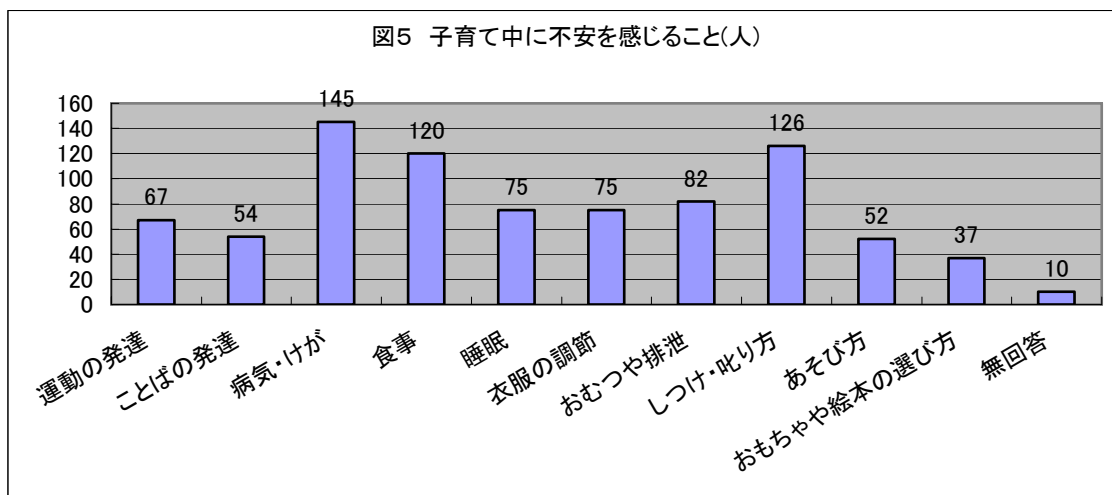
③子育て支援から「子育ての協働」を地域に育む多様なサービスの拡充を

利用したことのある子育て支援サービスや今後の要望では、「園庭開放」「親子ひろば」など、親子参加型で、子どもを安心して遊ばせることができ、かつ、他の親と交流できる場が最も必要視されていることが明らかとなった。みたか小鳥の森保育園は乳児保育園であるだけに、子育ての開始期にあって、親子が出会い向き合う関係を確認なものにしていくことや、地域の親同士・子ども同士が交わり結びつきあっていくことに、大きな役割を果たしていくことが期待される。ましてや、日常保育の多様な知見の蓄積、遊具の豊富さや施設設備の安全性に加え、子どもの育ちに関わる専門家がいる保育所は、乳児を育てる多くの父母にとってはかけがえのないところであり、その安心をより多くの父母に届けていく工夫が求められているといえよう。それはすなわち、どちらかといえば通常保育の利用者層に限定されてきたこれまでの「子育て協働の輪」を、地域の父母・子どもたち全体に広げていく課題である。

通常保育以外の多様な子育て支援サービスに関する要望を鳥瞰すれば、「育児相談」を「子育て協働の輪の結び目」に位置づけて、多様なサービスを配置することが今後の事業展開に望まれると考える。つまり、「一時保育」「園庭開放」「親子ひろば」「体験保育」等々のサービスを円環状に配置しながら、そこを通じて持ち込まれたり表面化する多彩な悩み事・子育て困難を「育児相談」のサービスによって結び付け、循環させていくイメージである。このイメージの中では、従来の通常保育が、閉ざされたメンバーシップを対象にした、保育所の保育者集団による保育であったことに対し、開かれた出入り自由のメンバーシップの、親子主体の営みに対して、保育の専門家が勤務で「子育て協働の輪」を強めていくという展望を描くことができる。

それでは、保育所がまさに保育の専門的機能を発揮すべき具体的なポイントはどこにあるのだろうか。

次の図は、「子育て中に不安を感じること」と「聞いてみたい育児講座の内容」に関する回答結果である（再掲）。「不安」については「病気・けが」「しつけ・叱り方」「食事」の3項目で、「聞いてみたい育児講座の内容」では「しつけの話」「かかりやすい病気の話」「年齢に応じた遊びの話」の3項目で、それぞれ50%を超え、その他の項目では「子どもの遊び」に関連するものが一定の高さとして表れる。



これらの要望内容は、乳幼児の必要や発達要求に照らしていずれも当然のものではあるが、支援の性格づけとしては、「病気・ケガ」と「食事」に関する項目は、ある程度はノウハウと情報の提供によって不安の解消に目途をつけることができるのに対し、「しつけ・叱り方」と「子どもの遊び」に関する項目は、親子の向き合い方・関係性・活動の質が問われる内容をもつものと区別することができる。とりわけ、「しつけ・叱り方」に関する不安が子どもの年齢

が1～2歳にかけて高まることは(8ページ表1参照)、二足歩行とことばの獲得によって、親が子どもに、文字通り、人間として対し、人格として交わる開始期に現れる現象として注目すべき点である。

このようにみえてくると、多様な子育て支援サービスの括り方としては、一方で、「病気・けが」「食事」などのノウハウと情報の提供をコアに構成するサービスを「子育て協働の輪に入る」契機として考え、他方では、「しつけ・叱り方」「子どもの遊び」などの親子の向き合い方や活動の質を支えるサービスを「子育て協働の輪を強める」ものとして据え、これらの循環を支える結び目に保育所の保育者集団が位置づいていくことを構想できるのではないだろうか。

以上が、今後の保育所に求められる地域子育て支援サービスのデザインである。子育て不安の大きな要因である「孤立化」の問題が指摘されて久しく、子どもの虐待をめぐる事態は深刻化の一途をたどっている。ここに、みたか小鳥の森保育園のこれまでの歴史に立脚しつつ、保育所を拠点とする、新しい時代にふさわしい子育て支援サービスの実施＝「子育ての協働の輪」の構築が期待されている。

4) 『地域に開かれた保育所の活動に関する調査研究報告書―平成15年度―』社会福祉法人日本保育協会、2004 p.123

5) 全国保育団体連絡会『保育白書 2004年版』草土文化、2004 p.15

6) 同書 p.204、p.217